

現職教員による国語科教育法の協同研究

井 上 志 音

1. はじめに

本稿は現職の国語科教員による教科教育法の協同研究の成果を報告するものである。具体的な活動報告の前に、まずはこのような教科研究会を実現することができた背景について述べたい。

このような現職教員の協同的な教科研究会を実現するためには、参加者各人の持つ職業意識、例えば教師観や指導観、あるいは生涯学習に対する考え方などが重要な要素となることは言うまでもない。ただ、それらを結びつけて組織化し、個人の持つ経験や職能といったいわば文化的・社会的資本を相互に共有し蓄積していくためには、何らかの公共的な支援体制や人的ネットワーク等の基盤が必要不可欠となる。

そのような観点で考えた場合、本研究会の実現にあたり、「関学教師の会」は欠かせない存在であった。本会は関西学院大学のスクールモットー“Mastery for Service”の理念を社会で実践し、かつ会員相互の研鑽と親睦をはかり、もって日本および世界の教育の発展に寄与することを目的として2006年に設立された団体である。関西学院同窓会には兵庫県の国公立高校の同窓教員のための公認団体「高弦会」が存在するが、本会は創設から現在に至るまで関西学院に関係し、教育機関に従事する全ての現職教員（学校種や勤務地を問わない）を加入対象として現在も活動が続けられている。

これまで関西学院を卒業した教員の数は3000名を超えと言われる。本会はこれら現職教員の単なる相互交流の場として機能するだけでなく、年に一度「全体総会」を開いて教育研究の場を提供するなど大きな社会的機能を果たしてきた。この総会では、昨今の学校現場での教育の諸問題をテーマにした講演会や、世代・学校種・勤務地といった垣根をこえた現職教員相互の多様な意見交換会など様々なプログラムが組まれ実施されている。また、本会はこのような年に一度の総会のみならず、教職教育研究センターの協力のもと、教育界で活動する様々な話題提供者を招いて「教育研究会（4～11月）」を西宮上ヶ原キャンパスで開いている。

こうした取り組みが全て一貫した建学の理念のもとで運営されていること、また大学の全面的なバックアップのもとで成り立っていることは特筆に値する。現役学生

ならまだしも、既に卒業して現場に立っている現職教員の生涯学習の場を大学が提供していること、またそのような中で初等・中等・高等教育機関に従事する教員が、教職を志す現役の学生をも巻き込みながら相互につながり、共に学びあうコミュニティを長年にわたって作り上げてきたことは他大学でも類を見ない。このような支援体制や人的ネットワークの基盤があったからこそ、今回のような教科教育法の研究会を実現できたと言える。

2. 「国語教育研究部会」設立の経緯と概要

2014年4月、先の「教育研究会」から分化する形で、同じく現職教員を構成員とする研究会「国語教育研究部会（以下、国語部会）」が新設された。

先述の通り、それまでも「関学教師の会」は定例の全体総会および教育研究会を開催しており、現職教員の研鑽の場として多大なる役割を果たしてきたが、その扱う内容はあくまでも普遍的な内容を主題とした論文の講読や、学校現場の諸問題に関する意見交換会など、参加者の教科や校種を問わない全般的なものが多かった。よって現職教員の間からは、かねてより各教科に特化した専門的な研究会の新設を求める声が挙がっていたが、実現までには至っていなかったという経緯がある。

そこで昨年、筆者は私立高槻中学校・高等学校教頭の福田秀樹氏と共同で発起人となり、国語教育の今日的な課題を専門的に扱う教科研究会を立ち上げた。なお設立にあたっては研究会の趣旨として以下の3点を掲げることとした。

- ・国語科教員の世代を超えた繋がり強化。
- ・教員としての授業力および教材作成能力の向上。
- ・教職課程に在籍する学生の能力の開発に寄与する。

また、2014年度の研究会の年間計画および各回の具体的な内容については後ほど詳述するが、その策定にあたっては以下の事項を念頭に置いた。

- ・現代文、古文、漢文の模擬授業および事例報告。
- ・授業で用いる教材の作成および作問研究。
- ・校種に合わせた指導計画およびカリキュラムの構築。

以上のような趣旨・方向性のもと、国語部会は新たに始動することとなった。次章ではこの研究会の具体的な活動状況について見ていくこととする。

3. 活動状況

日 時	場 所	実施内容
4月19日(土) 16:00-17:30	関西学院大学 大学院1号館	初回ミーティング 「年間計画の検討」
5月24日(土) 15:00-17:00	関西学院大学 大学院1号館	授業研究会 「中学小説」
6月14日(土) 16:00-18:00	関学中学部 小教室1	授業研究会 「高校古文」
7月26日(土) 15:00-17:00	関西学院大学 大学院1号館	作問研究会 「高校小説・評論」
8月23日(土) 12:00-15:00	関学中学部 小教室1	討論会 「板書の理論/実践」
9月20日(土) 16:00-18:00	関学中学部 小教室1	授業事例報告 「現代文演習」
10月18日(土) 16:00-17:30	関学中学部 小教室1	討論会 「詩歌の扱い方」
11月29日(土) 16:00-18:00	高槻中高 普通教室	施設見学/授業研究 「ICT 機器(電子黒板) を用いた授業」

国語部会の年間の活動実績をまとめたものが上の表である。2014年度は計8回の開催となった。運営の基本的方針としては、原則的に月1回(4-11月)土曜日の開催とし、各月の開催時間は土曜日に午前授業のある学校や、クラブ指導等の校務に配慮して夕方に設定した。

1年間実施をしてみて課題は数多く残された。各回の具体的な研究テーマと年間計画は、4月の初回ミーティングで検討したものの、当初はどれくらいの参加者が見込めるか、またどこ会場が使えるのかが不確定だったため、その内容は二転三転した。各回、国公私立を問わず様々な学校の、そして広い地域から参加者が集まったが、総じて今年度は中学校・高等学校の進学校教員および教育研修所からの参加者が多数を占めていた。そのため研究会で扱う内容も必然的に中高向きのものを多くせざるを得なかった。しかしながら、国語という教科の特性を考えるならば、素材文の選び方を工夫することで、小学校や幼稚園、特別支援学校の教員が参加できるように調整することも可能だと考えている。国語教育という広いテーマをどういった切り口でどのように研究していくのかは、各回の参加者の学校種のバランス等を考慮しながら臨機応変に考えていく必要があるだろう。

また、現役の学生に対しては、毎回研究会の広告を作

成し、教職教育研究センターの学生支援室前の掲示板に掲示したほか、文学部および教職関係のいくつかの講義内でも告知頂いた。その結果、2014年度は教育学部および文学部日本文学科2～4回生の参加が見られた。

国語部会は現役学生の参加も認めているため、テーマ選びは学生にとっても有意義なものでなければならないと考えている。特に大学の教職課程で受講する教職専門科目だけでは体得することのできない、現実的で実践的な内容を盛り込みたいという意図のもと、7月に「作問研究会」、8月に「板書の理論」を取り入れた。実のところ、大学の「国語科教育法」では、これら作問と板書の具体的な方法論については体系化して学生に指導しない。教育実習の期間まで、現職教員の生の板書や作問(の結果としての教材プリント)を見る機会が与えられていないというのが実情である。「教材を前にどのような作問するか(そして難易度をどう調整するか)」「教材にあった効果的な板書はどのようなものか」といった現場で必ず求められる能力は、良くも悪くも教育現場に立ってから独学(見様見真似)で身につけていくということが日本では慣例となっているが、こうした現実的で実践的な力を学生時代に体験し、培っていくことは重要である。現職教員が集う本研究会は、それを実現できる可能性を持っており、それが国語部会の存立意義の一つであるとも考えている。

2014年度は国語部会の開設初年度ということもあり、まずは参加者の経験や手持ちの教材をもとにしたプログラムが多くならざるを得なかった。そのため、活動の取り組みを全体的に振り返ったとき、活動内容に一定の偏りや狭さが生じてしまった感は否めない。

初年度の活動概況から見えてくる反省点は、来年度の年間計画に活かしていく必要がある。

4. 活動報告

活動内容の全体のバランスや運営方法については、様々な課題や問題点も見出せるが、各月の研究会の内容を個別的に振り返るとそれぞれのテーマは深く掘り下げて展開されており、そこで得られた知見は大きい。

本章では2014年度の活動状況を、(1)授業研究会および事例報告、(2)作問研究会、(3)討論会、(4)施設および授業の見学会の4つに分類し、それぞれの活動内容を具体的に報告していくことにする。

(1) 授業研究会および事例報告

(a) 中学小説一別役実『空中ブランコ乗りのキキ』

5月の研究会では、三省堂『中学生の国語1年』より別役実『空中ブランコ乗りのキキ』を取り上げ、筆者が

模擬授業を担当した。筆者は現在、私立灘中学校で中学1年生の教科担当をしているため、本授業はいわゆる研究授業ではなく、灘校で実践した授業をありのまま再現するというスタイルで行った。

本授業では参加者に灘校の生徒の授業ノートの写しを配布したうえで、登場人物の「心情説明」の説明手法を中学生向きに提示した。一見、曖昧で捉えどころがない心情というものを、文章中の根拠を挙げながら限定し、言語で記述するためには何を考えればよいのか。

授業では生徒が無意識のうちに主観で捉えがちな場所を取り上げ、心情説明の方法論を次の①～③の順で説明した上で、実際に記述の作成に取り組ませた。

- ① 人物の言動から心情を読み取り、その心情を表す言葉を自分の語彙の中から創出させる。
- ② 言葉として立ち現われてきた心情は前向き（ポジティブ）なものか、それとも後ろ向き（ネガティブ）なものなのかを考え、頭の中で区別させる。
- ③ 最後に、①の心情が生起するにいたった原因を、本文で叙述された事実関係（出来事・事件）をもとにまとめ、①に理由づけする。ただし、②において当該の心情が後ろ向きなものだった場合は、その心情の裏にある人物の理想や願望についても補足し、「〈理想・願望〉のに〈現実〉ので、〈心情〉だ」という流れになるよう留意させる。

本授業には、理系肌の生徒が多い灘校において「心情を客観的に捉え、それを論理的に説明することは誰にでもできる」ということを生徒に実感させることで、国語に対する苦手意識を少しでも軽減させたいという狙いがあった。参加者からは精読だけでなく味読を重視すべきとの指摘や、全体の内容把握はどうするのかといった質問が寄せられた。

（b）高校古文—枕草子第25段「すさまじきもの」

6月には高槻中高の前田教頭による枕草子の模擬授業が行われた。この授業は高槻高校の2年生を対象としたもので、「多読期における授業展開」をテーマに構成されている。この授業は古典文法を一通り終えた学習者を相手に、古文を味わい楽しみながら読み進めることを主眼としつつ、同時に本文の要点を押さえ既習事項を確認していく工夫が随所に凝らされている。

従来のような通り一辺倒な「訓詁注釈型」の古文学習ではなく、本授業では文法の確認事項が生徒の学習到達度に合わせて最小限になるよう厳選されており、「すさまじきもの」という段における物語の展開を、「プロット図」を通して確認するという手法が採用されている。「プロット図」とは、登場人物の感情の起伏と物語の展開（導入—クライマックス—終末）を単純化し曲線で書

き表したもので、学習者が物語の全体像を論理的に掴む上で非常に有効な方法である。

そして何より特筆すべきはその手製の教材の豊富さである。生徒の使い勝手を考慮した「助動詞活用表」、コンパクトで無駄のない「古典単語集」、用言・助動詞・助詞・敬語の要点が凝縮された冊子「古典文法のBible」、本段の主題「すさまじきもの」を生徒が現代の実生活に置き換えてまとめた作文集「現代版『枕草子』すさまじきもの」などの手作り教材が参加者に配布された。

また、そうした手作りの教材をインターネット上の共有フォルダにアップし、参加者がいつでもその教材をダウンロードできるようにするという案を提言して下さったことも非常に意味のあることであった。こうした教科研究会はとかく実践的な方法論や指導論に終始しがちである。参加者がそれぞれ手持ちの教材を共有し、それと自分の教材を比較し、改良することを通じて教材の質や開発能力を飛躍的に向上させることができる。教材データベースの構築とその共有は、研究会の新たな可能性を示唆するものであった。

（c）灘高第3学年「現代文演習」の事例報告

筆者が2013年度に灘高校の3年生に対して実践した演習授業の実践事例を報告した。模擬授業という形態はあえてとらず、演習授業に対する授業者の考え方を率直に述べながら、その都度参加者から質疑を受け付けていくという流れで進めた。

灘高には文章の読解ができていながら、いざ書く／説明するという記述の作業になった途端に実力を発揮できない生徒が散見される。その背景は、決して単純な文章力や語彙力の欠如にあるのではなく、「何の説明が求められているか」という発問者からの問いそのものへの理解不足が少なからず影響していると考えている。

では読解していることを前提に、記述の方法論の創出のみを追求した場合、生徒に対してどのようなものを提示できるのか。本報告会では、筆者が実際に使用した小テストおよびその解説プリントを参加者に配布し、その内容を吟味しながらそうした記述の理論の更なる構築を試みた。特に、「～とは、どういうことか／どのような意味か／何か」といった要約説明型の問いに対し、傍線内容のどの部分を換言（言い換え）し、どのような要素を補足（付け加える）すべきかについて、筆者独自の方法論を叩き台として提示し、参加者全員でその妥当性を検討した。

（2）作問研究会

先にも少し触れた通り、作問技術の習得は、現職教員

はもちろんのこと、現役の学生にとっても必要不可欠なものである。7月の作問研究会では、小浜逸郎『癒しとしての死の哲学』、原田マハ『幸福駅 二月一日』という二つの文章を課題文として参加者に事前配布し、作問をしてもらった。その作問の条件は以下の通りである。

- ・解答時間は大問2題で50分とする。
- ・難易度は関学大の入試問題程度とする。
- ・小問はそれぞれ五問ずつ作成する。
- ・漢字の読み書きの問題は不要。ただし、語句の意味や空欄補充等はその限りではない。
- ・最後に文章全体の主旨を問う問題を入れる。
- ・選択問題の場合は、その選択肢も作成する。
- ・模範解答の案は事前に作り意見交換会に備える。

参加者が所属する学校種は様々であるが、国語の作問作業は、対象学年によって問いかけ方の表現の差異こそあれ、基本的に素材文のどこに注目するかという点で同じ能力が求められる。語句説明・要約説明・心情説明・理由説明・表現効果の説明など、各種問題を学校の学習者像にあわせてバランスよく配置するトレーニングを全員で行った。

普段、個人あるいは勤務する学校の同僚としか行わない作問作業を、全く異なる学校文化・背景をもつ他校の教員と協同制作することで、自分の作問能力を客観的に見つめ直す契機となった。一方、一度も作問経験のない現役学生にとっては、厳密な客観性に根差した作問の難しさを体感する得難い経験になったと思われる。

(3) 討論会

(a) 板書の理論と実践

板書は、授業者の文章に対する読みや授業に対する考え方が、最も具体的な形として現れるものである。裏を返せば、そのスタイルは授業者に依じて千差万別であり、何をもって「良い／悪い」とするかはその判断が難しい。その意味で討論のテーマとしては相応しいと思い研究会で取り上げることとした。

参加者と討論する中で、板書する上で考えねばならないいくつかの要素が浮き彫りになってきた。例えば「読むこと」「書くこと」の育成を念頭に置いた場合、国語の授業で実現すべき領域には、以下の4つの事象があることがわかる。

- ・書かれた内容が情報として「わかる」こと（狭義の読解力）。
- ・書かれた内容を「実感」し、他の文章も「わかる」ようになること（広義の読解力）。

- ・書かれた内容を、端的な言葉で要約できること（狭義の記述力）。
- ・書かれた内容をもとに「思考」し、自らの考えを言葉で表現できること（広義の記述力）。

テストで結果を出す、受験に役立つという実用的な意味で授業を捉えるならば、板書は言うまでもなく狭義の読解力・記述力に根差した内容になるだろう。一方で、書かれた文章を生徒が「実感」し、それをもとに「思考」することを目指すのであれば、広義の読解力・記述力を促すものでなければならない。

こうした議論は二者択一で考えるべきではない。単元内容に合わせて、授業者はバランスよく板書を準備する必要がある。その意味で、授業者は両方使い分けられる技能が求められている。参加者から「何を板書しないかを予め考えておくべき」との意見が出されたが、これは板書の本質を端的に指摘している。具体的な文章作品をもとに、それぞれの立場・視点で板書案を検討し、板書として「何を残すか／省くか」を共に考えていく取り組みは来年度以降も継続すべきだろう。

(b) 教材としての詩歌

前述の読解力の議論にも通じるが、書かれた内容の外に広がる領域を授業で扱うことは、書かれた文章の枠内だけを扱う授業より一段上の技能が求められる。言外に広がる作品世界の鑑賞は、正確な作品理解の上に成り立つからである。その意味で、全てを語らず読者の自由な想像力に委ねる一面を持つ詩歌は、それを教材として扱う際には時に様々な困難を伴う。

あるテーマを掲げて生徒に実際に詩を書かせ作品集として取りまとめたり、俳句や川柳など外部の各種コンクールに参加したりと、やはり授業者は具体的な言語活動として詩歌を扱う傾向にある。百人一首のかるた大会もその流れを汲むものと言える。

新しい学習指導要領の中では、国語の授業内における言語活動の重視が声高に唱えられている。それによって生徒のどんな力を育むのか、その成長はどのように評価できるのか。昨今の言語活動一辺倒の潮流は、活動自体が自己目的化し、理念や目標があたかも後付されていると批判することもできよう。単にやりっ放しの単発的な言語活動に陥らないよう、本研究会では、本質的な意味での詩歌を活かした教育方法の協同開発を検討していくべきである。

(4) 施設および授業の見学会

2014年度最後の国語部会は、私立高槻中highで施設見学会および、ICTを活かした授業の事例報告会が実施さ

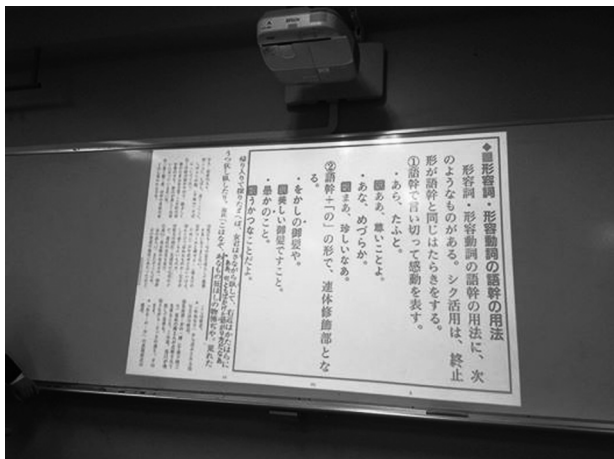
れた。高槻中高は全教室に電子黒板が設置してあるなど、ICT 機器が積極的に導入されており、その活用方法の研究も教職員の間で進んでいる。

事例報告会では前田教頭より電子黒板を用いた古文の授業紹介が行われた。高校生を相手に一年かけて読みこんだという源氏物語の独自教材を使って、電子黒板の活用例を紹介頂いた。

プロジェクターを用いてパワーポイントのデータを映し出すという従来の方法とは違い、電子黒板は映し出された画面を直接タッチパネルの画面のように扱うことができる。そのため、ホワイトボード上の画面を授業者がタッチすることで、そこにリンクされた別の画像や映像を映し出すことができたり、映し出された画面に文字を直接書き入れたりすることもできる。

また、タブレットと連動しているため、例えば演習授業などでは、生徒の解答を直接カメラで撮影して画面上に瞬時に投影させ、そこに添削を書き入れたりすることもできる。授業者が古文の地の文を黒板に板書したり、生徒が解答を書いたりする時間を削減できるため、授業の効率が格段に上がるという点を教示頂いた。

こうした授業も、やはり事前の準備がネックになるが、先にも述べた通り、参加者が教材データを一か所に集めて相互にデータを共有し合い、そこに授業者が学校の実態にあうよう改良を加えるという体制を構築できるのであれば、実用化の道は更に拓かれるものと思われる。



高槻高等学校における電子黒板の活用例

5. おわりに

以上、2014年度の国語科教育研究部会について、設立の経緯と概要、そしてその具体的な活動内容を通観し、その反省と成果を振り返ってきたが、改めてそこから今後の課題を見出すことができる。

まず、本研究会の存続は今後どれだけ安定的に参加者

を確保できるかという問題にかかっている。参加者の多様性が維持できなければ、教材のデータベースの構築は意味をなさず、また研究会における授業研究や議論にも広がりはい生まれない。研究会のプログラムをより魅力あるものに改善することは言うまでもないが、告知方法などは見直す必要があるものと思われる。2014年度は主にメールと学生支援室前の広告による告知のみを採用してきたが、開催日の策定および告知方法等は SNS の活用も視野に入れながら今後再検討していく必要があろう。今後も研究会の基調を微調整・転換させながら、幅広く参加者を募り、特に現役の学生や若手の新任教員が積極的に参加でき、自身の教育活動に対する疑問や悩みを自由に発言できるような体制を作り上げていきたい。

また、この国語部会で行き交わされた議論や研究成果は何らかの形で今後も蓄積し、積極的に発信していかねばならない。今回のように紀要を通じた活動報告はもちろんのこと、各個人の研究論文の発表、さらには全体総会での成果報告など、できることの余地は残されている。

2015年度の国語部会は、4月からまたスタートを切ることになる。教科教育法、教育課程論等に限らず幅広く国語教育の今日的な課題を取り上げ、微力ながら国語教育の発展に寄与できればと考えている。

参考文献

- 岩田康之・高野和子『教職論』（学文社、2012年）
- 梶田毅一『教師力再興―優れた教師に満ち満ちた学校に』（明治図書、2010年）
- 木岡一明『教職員の職能開発と組織開発』（教育開発研究所、2002年）
- 黄順姫『同窓会の社会学―学校的身体文化・信頼・ネットワーク』（世界思想社、2007年）
- 三輪健二『生涯学習の理論と実践』（放送大学教育振興会、2010年）

謝辞

月例の国語部会の実施にあたり、会場を快く提供して下さった教職教育研究センター、関西学院中学部そして高槻中学校・高等学校の教職員の皆様に厚く御礼申し上げます。

付記

本稿で取り上げた「国語教育研究部会」に対するご意見、ご要望等がございましたら幹事の井上までご連絡（shion@l.nada.ac.jp）ください。

（いのうえ しおん・灘中学校・灘高等学校教諭、武庫川女子大学非常勤講師、神戸大学大学院国際協力研究科博士課程後期課程）